書評

小沼孝博著
清と中央アジア草原
――遊牧民の世界から帝國の邊境へ――

野田　仁

本書は、一八世紀前半から一九世紀半ばまでの中央アジア史、とくにその草原部における歴史の展開を軸にして、東方の清帝國による征服・支配體制の構築・統治の縮小の過程を描いた大著である。この時代の初期は、本書の副題が示唆するように、ジューンガル遊牧國家が霸權を唱えていた時期に相當する。その後一七五〇年代にジューンガル政權は瓦解し、あらたに「中央アジア草原」（著者の用語であり、天山山脈の北側、ジュンガル盆地からカザフ草原東部を示す［本書一頁］）を繼承したのが清であった。しかし、清の支配理念と中央アジアの諸集團との關係の間にはさまざまな乖離があり、一九世紀前半には、清はその西北領域を再編することを迫られたのである。この分野の先達である佐口透の名著にちなんだ「中央アジア草原」の語はイメージしづらい所もあるが、中央アジア草原地帶の歴史が大きく變わる轉換點となったいわゆる清によるジューンガル遠征（一八世紀半ば）を挾んで、前後の歴史を統合し、新たな像を提示している點が本書の最大の貢獻と言えよう。とくにジューンガルに對する政策・對應を軸に草原の歴史を見通す著者の手法は、海外の學界を含めてもきわめて斬新なものと言える。

各章の議論を紹介する前に、評者の立場を明らかにしておきたい。評者は、本書の構成では後半の第二部と重なる、一八世紀半ば以降における中央アジア史について、とくにカザフ遊牧民に焦點を當て、そのロシア・清雙方との關係について考察を進めてきた。本書中にも評者の研究がときに批判的に言及されている箇所があり、著者の論とは相容れないことも殘っているが、この書評は批判に應えることを目的としない。むしろ、よく知られているとは言い難いこの地域の歴史研究の中で、本書が果たしている重要な役割を解説することに努めたい。本評では、できるだけ著者自身の言葉遣いにならって表記している。また、すでに村上信明（「中央アジア草原における大國間の「境界」の淵源を探る」『東方』四〇八號、二〇一五年）、長沼秀幸（『内陸アジア史研究』三〇號、二〇一五年）による書評もあるので併せて參照されたい。

序論、第一部（五章＋補論）、第二部（四章）、結論で構成される本書は、時代の轉換に合わせ二部に分けられていると言えよう。第五章が後ろの年代も扱っているものの、折り返し地點は、ジューンガル征服を端とする一七五五-一七五九年の清による西征と、それに前後する清＝中央アジア諸集團間の關係開始に置かれている。各部には導論と小結が附されており、全體像を把握するにはまずそちらを參照すると良い。

序論が定義する本書の方向性は、清朝史・中央ユーラシア史の雙方を相互の文脈を踏まえて見直すことにある［六頁］。具體的には、擴大の時代を終えた清の國家形成とそれと表裏一體となる「中央ユーラシアの周縁化」を統合的に檢討することである。そのための史料として、著者は、清朝の公文書、とくに中國第一歴史檔案館所藏の「軍機處全宗」に屬する滿洲語文書を大いに活用し、結果として、本書の議論はこれまでの歴史像を ―― 清朝史、中央ユーラシア史雙方の文脈で ―― 書き換えることになった。

前半第一部は、清によるジューンガル征服という事業を根本から再檢討する。主眼は、『平定準噶爾（ジューンガル）方略』と『十全武功記』という編纂史料における、乾隆帝による二つの「トリック」を見破ることに置かれている［一七-一八頁］。つまり、これまでのジューンガル征服にかんする史料は、清の意圖するイメージになるもので、征服のプロセスについての認識からしても、實態とは異なっているというのである。著者の檢證により明らかになった四次にわたる遠征という枠組みに基づき、著者は清の對ジューンガル政策を詳らかにしていく。

第一章は、西モンゴル系オイラト諸部のうちジューンガル部の長が政權を擔う遊牧國家ジューンガルの形成過程を概述した上で、ジューンガルの支配體制・社會組織を檢討する。注目すべき點は、集團構成の二重構造である。これは、ジューンガル部長に直屬する「中心」の二十四オトグと、ジューンガル以外の各部（チョロス、ドルベト、ホショト、ホイト、トルグート）の有力者の所領である「外縁」の二十一アンギを指す。オトグは數千戸から成り、これらをザイサンが統率する。オトグの構成の分析により、オトグ增設の過程と征服したオイラト諸部・異族集團の編入過程を見ることができる。また、ザイサンの稱號で呼ばれる中間支配層の存在も本書の議論において重要な役割を擔っている。ザイサンの中にはジューンガルの君主の本營に出仕し、ザルガと呼ばれる「諮問會議」を構成するなど政權の中樞にも參與する者があったからである。

第二章は、これまでの定説を大膽に見直している。すなわちジューンガル政權が瓦解し、有力者たちが清に降った後、清が定めた「四汗（ハン）部構想」への疑義である。その際に、これまで等閑視されてきた「平定準噶爾善後事宜」の檢討が必然であった。結果として、前章で明らかになった社會の二重構造にあわせて、清側の對應も一元的なものではなく、イリ盆地の外側に位置する「四オイラト」と中央のオトグに分化していったことが示される。前者は、盟旗制導入と諸タイジの封爵を主とし、後者については、內屬旗である「オイラト八旗」へ編成し、ザイサンに統轄させるという構想であった。

續く第三章では、上記の構想の實現過程を、とくにオトグ支配の展開に焦點を當てて論ずる。清によるザイサンの任命が、從來のオトグの枠を越えて行われたこと、また軍役の負擔が鍵となっている。注目したいのは、本書で重要な概念として設定されている「エジェン-アルバト關係」がここで姿を表すことである。著者によれば「モンゴル社會に由來する」「統屬・主從關係」を言い表すこの表現［九四頁］が、オイラト支配にかかわる局面で清の爲政者によって繰り返されていたのである。その端緒が、ここで説明される、清朝皇帝をジューンガル部長に代わるオイラトの

新たなエジェンとし、オイラトを清朝皇帝のアルバトと位置づけるロジックであり、「正當性」の根據であった。その前提として、このときまでに成立していた清朝の皇帝の稱號としてのエジェンがある。「ハン」號との對照の上で皇帝の「エジェン」號確立を論ずる第一部末の補論も參照されたい。

第四章は、アムルサナの反亂により從來の研究の中で覆い隱されていた「オイラトの蜂起」の實態に迫る。著者の定義によれば、この「蜂起」は、ジュンガリアに殘っていた首長層による清軍襲擊であった。とくにガルザンドルジの對應を再檢討している。彼らオイラト首長層は、清による四汗部構想に反發し、ときに東トルキスタンのムスリム勢力を卷き込んで反清運動を展開しようとしていた。ジュンガリアに遊牧地と屬民を有する者たちにとって、清の構想は、たとえハン號を與えられようとも自己の權力の限定化に他ならなかったからである。これを受けて清による第三次遠征が行われ、一七五五年以來のオイラト支配は破綻に終わった。

第五章は、ジューンガル遠征前後のイリの地域社會に焦點を當てる。新疆北部の主要な都市であるイリ（現在の伊寧）は、ジューンガルの據點が置かれていた當時から多民族で構成される空間であった。本章では、一七五九年に至る遠征の結果、オイラトの人口減少を受けて駐防八旗が形成される過程を詳細に示す。オイラト＝ニルの形成はその象徵であり、全體として、イリが「遊牧民の據點」から「清の邊境防衛と新疆統治の據點」となる諸相を明らかにしている。イリにおける駐防八旗の編成については、オイラトの存在が樣々な影響を及ぼしているとし、ニルの定員數、「アンギ」を編成單位とする點、領隊大臣設置などを指摘する。こうして形成された軍營が、本書第二部における新疆統治・中央アジア諸勢力との關係構築において役割を果たすようになることは言を俟たないであろう。

後半の第二部に先立ち、導論で先行研究の三つの問題點を示している。前二者は本書全體を貫く問題意識とも言え、「中華世界秩序」に基づく議論、漢文編纂史料への傾斜に對する批判である。第三に、清の領域認識のあり方へのまなざしであり、第二部で示されるジューンガル征服後の清の中央アジア政策を分析するための鍵となる要素である。ここで留意すべきは、清がジューンガルの勢力範圍をすべて繼承したと認識していたこと、その認識と實效支配を及ぼす範圍との間にズレが生じていたことの二點である。以下、清とカザフ・クルグズとの關係を中心に、中央アジア草原において展開された諸政策を檢討していくことになる。

第六章は、ジューンガル後の「中央アジア草原」を占めるカザフ遊牧集團に焦點を當て、清が彼らとの關係をどのように把握していたのかを明らかにする。一七五七年の清軍への「歸順」により、兩者の關係の端を開いたカザフの有力者アブライの「歸降表文」（オイラト語）の分析は、言語によるテキストの違い、また關聯する上諭の性格の違いをも考察した、舊稿以來變わらぬ高い價値を持つ論と言える。カザフの「歸順」は、カザフが清朝皇帝のアルバトとなると理解され、清がカザフとの關係において「エジェン－アルバト關係」を敷衍していたことが示される。一方で、著者によれば、ジューンガル支配の失敗という轍を踏まぬよう、カザフ社會には積極的に關與しない方針であった。その後のカザ

フからの入覲使節派遣を經て、カザフに對して送られた清側使節による交渉では、實效支配の否定、爵位授與、入覲使節の人員構成など關係の主要な枠組みが定められた。また、本章では、第一部における議論 ——ジューンガルに對する政策 —— の延長上にカザフその他の中央アジア諸勢力との關係を位置づけようとする著者の姿勢が鮮明に表れており、本書の前後半を架橋する役割を果たしている。

第七章は、一七六〇年代の交渉を中心に檢討し、中央アジア草原が清の西北領域へと姿を變える過程で、本書のもう一つの重要な概念である「屬人主義」・「屬地主義」の二つの側面がどのように作用していたのかを見る。カザフ以外にクルグズ、コーカンド、パミールなどとの關係構築においても、少なくとも清側にとっては、「屬人」的な論理の象徵とも言うべき「エジェン－アルバト關係」の敷衍があった。それに據って、清はアルバト間の抗爭にも ——ときに積極的に—— 關與することになる。「エジェン－アルバト關係」が清朝皇帝と官僚との共通認識の下で、「政策實踐の理論的根據」として機能していたと著者は議論を整理する。なお、カザフについては、牧地の近接に由來する越境も問題になった。このとき何を清の「境界」とみるべきかについて、著者は問題提起を行っている。清の領域認識と實效的防衛線となったカルン線とのズレに注目し、屬地的な區分であるカルン線の內外よりも、屬人的な論理をより重視する場合があったことを指摘している。その例がカザフの移住希望者を受け入れニルに編成する「內附」政策であった。

續く第八章が、一七七〇年代の政策の動き、方針轉換を具體的に分析している。カザフの入覲使節への對應などから清－カザフ關係の惡化が明らかになる。最終的に、內附政策も一七七九年に停止され、清は對外的不干涉の原則を確定させていく。他方、カザフの側から見ても、カルンは自由な移動を制限するものとなり、ここに「屬地主義の意識が屬人主義の概念を凌駕」したと著者は論ずる。結論の表現を借りれば、これは清朝國家の「體質變化」であった。また、清の消極的姿勢にかかわる論點として、著者は、ロシアの存在と「邊境知」の喪失、交涉の第一世代の死、カザフの支配者間の爭いの三點を擧げ、一八世紀末には清の姿勢が確定していたことを確認している。

第九章では、清にとっての「境界圈」となっていたこの地域へのその後の關與を、巡邊制度に注目しつつ論ずる。この制度は、清が一七六一年より、カルン線の外側に廣がる「卡外界內」地域に對して定期的に派遣していた部隊のことを意味する。現地駐防官の建議により、換防兵派遣と組み合わせて巡邊制度を調整する動きもあったが、一九世紀前半におけるロシア・コーカンドの外壓により、監視の對象範圍は縮小した。現地からの制度再建の試みにもかかわらず、一八三三年の道光帝による指示が象徵するように、清の方針は受動的なものに止まっていた。最終的に、カルン線を「防衛ライン」とすることになり、事實上の支配領域は縮小した。その結果、西北邊境に境界が姿を表すのである。

以上、若干の評も交えながら各章の內容を整理した。限られた紙幅で內容をすべて概觀することも難しいほど、本書は多くの新しい、もしくはこれまで明確に整理されてこなかった問題を解き

明かそうと試みている。當該時期の中央アジアの草原部について、著者が依據する清朝の滿洲語文書がこれほどに豐富な情報を持っていることにまず驚かされる。とくにオイラトの社會構成については、盲點となっていたと言えよう。未踏かつ大量の檔案史料に挑んだ著者の慧眼と努力に敬意を表するばかりである。さらに滿洲語の上奏・上諭のみならず、現地勢力發の文書を檢討していることは、本書の考察に大きな廣がりを持たせている。

本書の功績は ――― 中央アジア史の觀點からは ――― 以下の三點にまとめられるだろう。

第一に、ジューンガル史そのものの見直しとして劃期的である。政權・社會構成の二重構造またザイサンらの役割について、先行研究の誤りを正しながら、鮮やかに提示したその考察は見事である。この成果を利用して、本書が對象とする前の時代についても檢討可能であろうし、ジューンガルの周邊勢力との關係も再考を迫られていると言えよう。

第二に、ジューンガル政權の支配領域を一つの空間として描いている點である。ジューンガル政權の滅亡後この地域に影響力を行使した清朝の政策を、つねにジューンガルとの關係を念頭に置くことで、聯續性をもって新しい姿を提示することに成功している。そのための裝置が「エジェン－アルバト關係」であると思われるが、この點については後述する。地域における聯續性という觀點からは、清のジューンガルからの繼承性について、結論でも若干の檢討が行われるものの［二八〇頁］、もう少し深く議論してもよいのではと思われた。これはジューンガル後の清の支配の正當性とも大きく關わってくる問題と考えられるからである。なお、これまでしばしば言及されてきた佛教の視點から見た兩者のつながりは、本書ではおそらく意圖的に捨象しているとみられる。そのことも本書の特色の一つとなっている。

第三に、中央アジアの遊牧社會について變容を明らかにしている點である。結論で著者が述べるように、それは、歷史展開の主役の座から遊牧民が轉落するという大きな變化で示される［二八二頁］。他方でその作業は、清側の視點から見て、帝國がどのように遊牧地を管理するようになったのかを示すことでもあった。政權瓦解後のジューンガルに對する「四汗部構想」は、のちに修正を餘儀なくされたとは言え、遊牧地の指定と合わせ、遊牧社會の「分斷と固定化」を意圖したものであった［二〇八頁］。また第二部があつかうカザフの遊牧地に設定された「境界」も、その延長線上に捉えることができる。先述のオイラト諸部の社會構成に加えて、カザフ遊牧民についても、本書はその集團構成にかかわる貴重な情報源となっている。なお本書には含まれていない論考中の資料も興味深い內容である[1]。

本書で新しく提示される概念・枠組みは挑戰的である。とくに「エジェン－アルバト關係」については、著者のこれまでの多くの論考の議論がより良く整理されていると感じた（なお、第七章註七八の指摘について、評者の記述はたしかに著者の意圖をくみ取っていなかったので訂正を要する）。「エジェン－アルバト關係」という枠組みを膨大な史料の檢討から導き出した著者の功績は疑うべくもないが、以下に、評者の小さな疑問點を記しておく。著者が繰り返し述べているように、この關係は、むしろ清において、ジューンガルやそれに關聯する諸集團（カザフなど）との關

係を説明・論理化する際に用いられた言説として注目すべきものであり、「屬人的なかかわり方」を表すものであった。したがって、名稱や語の起源には重點が置かれず、このような言説を共有していたことこそが最も重要な點であることも理解できる。その一方で、「エジェン－アルバト關係」を、清によるジューンガル部長の支配權繼承の正當性の根據とみなすのであれば［九七頁］、やはりオイラト社會内での定義・意義を確認しておく必要があったのではないかという疑問も生じる。もちろん著者の主眼は、清による政策實踐の上での論理的根據として共有されていたことにある。しかし、清王朝内（皇帝と官僚たち）だけでなく、オイラトに對して君主としての正當性を示し軍務を負擔させることを考えれば、オイラト側の視點でこの關係をどのように受け止める可能性があったのかを提示することは無駄にはならないだろう。史料的な制約も考慮しなければならないが、たとえばUyunbilig[2]がホシュートについて論じた早期のジューンガル史の文脈からの考察は有效であろう。また、支配・統屬關係については、ロシアのヴォルガ河流域に牧地を持っていたトルグート（カルムイク）には比較的多くの史料が殘されている。そこからの聯想でいえば、ロシアに殘ったトルグートや北方のブリヤート集團は、ロシア皇帝のアルバトとして描寫される例が見られ（後者については、Badmaeva[3]の研究などを參照）、清が中央アジアの諸集團に對して設定した關係と對照して議論ができそうである。

また、第二部で述べられる「エジェン－アルバト關係」の敷衍についても、著者のアプローチは歸納的であると言えよう［一七三頁］。清のジューンガル政權の繼承という前提に立てば、カザフなどの集團がかつてのジューンガルからアルバトとして扱われていたことも想定し得るが、著者の言うところの、この關係の「轉用」［二七七頁］の理由は明示されているわけではない。ここで想起されるのは、ジューンガル掃討戰の最中に、逃亡したジューンガル關係者の歸屬をめぐって清とロシア帝國が交渉を持ったとき、清側は、オイラトおよびジューンガルに屬する者たちの自らへの歸屬を主張していたことである。ジューンガル政權の繼承については、むしろ外交關係の中で強く意識されていた可能性があり、本書の議論とも重なるところがあるかもしれない。

著者はこの關係について、清側の設定のみにとどまらず中央アジア諸集團側にも共有され、相互の「對話のツール」［二七一頁］となっていたと說く。一方で、本書の讀み手は、清側で作成される文書史料が、當然のごとく清のロジック・理念にしたがって作成されることに留意しなければならないだろう。著者自身も記すように［一六八頁］、中央アジア諸集團側からの來文ですら、そこから自由ではない可能性をつねに考慮する必要がある。このことは、ジューンガルからの投降者による供述についても當てはまると思われる（後述する）。

清のアルバトとみなされた集團は、本書の事例が示すように多様であり、個別の事例の違いに拘ることは著者の意圖から外れるかもしれない。評者の都合でカザフに限定され、かつ瑣末な點だが、さらに疑問に思う箇所が三點ある。一．第六章はアブライらからの最初期の文書を題材にして「エジェン－アルバト關係」の敷衍を論ずるが、エジェンの語を用いているのはあくまでも清の參領の報告であり、降表そのものにはハン（qan）としか言及さ

れない點はどのように考えたらよいだろうか。二．「エジェン－アルバト關係」と竝んで擬制的父子關係をアブライと清朝皇帝との間に見出している點は興味深い。その際に舊稿における解釋の變更が立論上の重要な役割を擔っている［一六七頁、註三一］。ただし、ジョーフィの上奏中における滿洲語譯文では、別の解釋がなされているようだが、どのように整理すべきだろうか（なお、當該の上奏に言及する註二九が示す出典『新疆匯編』卷二五は卷二三の誤りであろう）。關聯して、一六九頁に引用されるアブライからロシア當局宛て書簡は、引用箇所に續けて清側が「講和」を認める內容が見られるため、清側の讓歩・低姿勢をアブライがロシアにアピールしていると受け止めるべきであって、清とカザフ間で共有される父子關係の論據とするのは難しいのではないかと思われる。三．清からカザフその他の中央アジア諸集團を指す表現として、二四二頁で「外藩」と譯されるtulergi aiman という語も同時期に見られるが、albatuとどのように對照させて考えればよいのだろうか。

なお、本書後半のポスト＝ジューンガル時代を語る際のキーワードである「屬人主義」、「屬地主義」について、議論はまとめられており、前者から後者へのシフトがさまざまな事例から說明されており分かりやすい。一つ附け加えるならば、この二つの語は、刑法なり國際法なりの用語として認識されることが多いと思われ、たとえば「ジューンガル領の繼承という屬地主義」［二八〇頁］などの表現はわかりにくい。これらの語の定義附けをより明確にしても良かったのではないだろうか。

さて、本書前半の興味深い點として、乾隆帝のトリックを解き明かすという著者の史料批判がある。その試みは十分に說得力を持っているだけに、なおのこと、他の史資料に對する扱いが少々氣になった。一つには上の作業の實證のためには方略そのものの編纂過程や方針を分析する必要があると思われた點である。

もう一點として、ロシア・舊ソ聯の研究や史料をどう扱うかという問題がある。清の政策に主眼が置かれている以上限りがあることも承知しているが、ジューンガル史は、舊ソ聯においてズラートキン以降それなりの蓄積があった分野であったことも事實である。しかしながら、本書ではそれらが十分にフォローされていない。たとえば第四章に關聯して、Chimitdorzhiev[4]は、アムルサナとガルザンドルジの對立關係についても言及し、アムルサナの行動のみが俎上に載せられていたわけではない。ズラートキンも述べるように、そもそもソ聯の學界でアムルサナ（およびチングンジャブ）に注目が集まっていたのは、まずIshzamtsの提示した枠組みがあり、さらにアムルサナが後にロシアに庇護を求めたことがロシア＝ジューンガル間の良好な關係を示すに好都合な素材となっていたという史學史上の理由に據っている。ズラートキン、ホジャエフ、グレーヴィチ等の著作に見える「反清」勢力の强調も、同樣の視點から考えることができ、本書でも利用の際には注記しておくべきではなかっただろうか。そのほかに、Kutlukov[5]は、本書でも用いられる*Āthār al-Futūh*（AF）などの現地語年代記等に基づいてジューンガル政權解體期を考察しており、その成果を踏まえることもできたように思われる。ロシア・ソ聯側文獻の利用に關聯して、第七章註五八について、ワリハノフは、一八世紀の文書史料に基づくVel'iaminov-Zernovの研究

を目にしているので、自身が中央アジア現地で集めた情報に依據しているとは考えにくい［二〇四頁］。

すでに述べた清朝史料上の文脈、またここで述べた西側文獻の扱いの二つの點に關聯して、ジューンガルからの逃亡者たちの供述について改めて確認しておきたい。政權瓦解前後の混亂期には、清側のみならずロシア帝國側にも逃亡したザイサンらがいた。彼らもまたロシア當局に對してオイラトの社會構成や當時の權力關係について證言・供述を行っている。その多くは舊ソ聯の文書館に保存され利用は容易ではないが、たとえば『ロシア・ジューンガル關係』(6)は一七五八年附けのあるノヤンの證言を收錄しており、支配層の權力鬪爭について獨自の情報を持つ。あるいは本書でも利用されるMOTsA2もデムチの證言を收めるなど、清側の記錄の檢證を行う上で有用ではないかと思われる。

蛇足ながら、誤字・脫字も含めいくつかの修正・補足をすべき點が見られる。まず年代について確認しておくと、アブライの沒年に不統一がある［一五七頁、二二〇頁］。二四七頁註二の清曆と西曆が一致しない。二七九頁の一七七八年は一六七八年が正しい（なお、この點は著者より直接訂正を受けた）。その他は二點のみ指摘しておきたい。一二四頁のアムルサナの逃亡先は、この時點ではすでにオレンブルクでは無いと考えられる。二二一頁のAq öyli(7)については情報が不十分で、すでに佐口透の著作にも言及があり、現代カザフ語やクルグズ語にも見られる表現であり、「人質」の意と考えられることを補っておく。

ここまで述べてきたことは、おもに中央アジアの側から見た場合の論點・疑問點であった。清の側から見たときに、二つの觀點があると思われる。一つは清朝全體から見たジュンガリア・新疆の位置づけである。すでに著者が、モンゴルとの比較の中で爵位授與と盟旗制の導入を論じているように［六二頁］、內外モンゴルあるいはトルグートに對する政策との對照は不可缺であろう。いま一つは、第二部小結において示される、多元的な清朝國家の像［二七〇頁］である。乾隆期のジューンガル遠征の過程で、これほどまでに清がオイラト諸部について情報を蓄積し、その支配に備えていたことは、本書の考察によって初めて明らかになったと言っても差し支えあるまい。清にとっての對ジューンガル政策の重要性、中央アジアへの視線は、清帝國の構造を考える上でもはや見過ごすことのできない要素と言えるのではないだろうか。

本書では、新疆北部のジュンガリアに重點が置かれていたが、著者には、南方のカシュガリアにおける清の支配確立についてもすでに業績があり、南北合わせた新疆における政治的變容の全體像の提示を強く期待するものである。

註

(1) Onuma 2010, “Kazakh missions to the Qing court,” in *A Collection of Documents from the Kazakh Sultans to the Qing Dynasty* および小沼二〇一四「ヌサン使節の派遣：一七五七年における清とアブライの直接交渉」『アジア文化史研究』十四號中の表を參照されたい。

(2) B. Uyunbilig, “The Hoshuud Polity in Khökhnuur (Kokonor),” *Inner Asia*, 4-2, 2002.

(3) L. B. Badmaeva, *Iazykovoe prostranstvo buriatskogo letopis-*

nogo teksta, Ulan-Ude, 2013.

（4） Sh. B. Chimitdorzhiev, *Natsional'no-osvoboditel'noe dvizhenie mongol'skogo naroda v XVII-XVIII vv.*, Ulan-Ude, 2002.

（5） M. Kutlukov, "Iz Istorii mezhdunarodnykh sviazei v Tsentral'noi Azii v 1755-1759 gg," *Iz Istorii Srednei Azii i Vostochnogo Turkestana XV-XIX vv.*, Tashkent, 1987.

（6） *Russko-Dzhungarskie otnoshenii*a (*konets XVII-60-e gg. XVIII vv.*) : *dokumenty i izvlechenii*a, Barnaul, 2006.

（7） 佐口透『ロ･シアとアジア草原』一九六六年、一五九頁。

二〇一四年七月　東京　東京大學出版會

A五判　七十三一四頁　七五〇〇圓＋税